

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第11章 祈りについてのパウロ その1①



クリスチャンのためのとりなし 心の証し

祈りについての教訓が最も良い形で学べるのは、祈りによってです。一方で、個人や諸教会に宛てた新約聖書の書簡からも、多くの指導や指示、矯正を学ぶことができます。これらの書簡で祈りに触れられている箇所を学びやすくするためにも、本章ではパウロを著者とする書簡を取り上げ、祈りの実践についての様々な教えを細かく見ていきます。また次章では、パウロの祈りそのものに注目し、あらゆるクリスチャンがこの偉大な使徒とともに祈り、それによって、彼がすべてのクリスチャンの特権として見ていたものを体験していけるよう、励ますことができると考えています。そして、さらに続く章では、ヘブル人への手紙と一般書簡を詳しく見ることにします。

これまで、使徒パウロほど、聞かれる祈り、強力な祈りをした人は、ほとんどいません。記録されたその祈りには、読む者が誰しも自分の祈りとの対照で気後れしてしまうような、高みと深みが浮き彫りにされています。さらに、記録されたものをはるかに超えたところには、祈りについての彼の深い理解と指示があり、それは、神ともっと深く交わられるような祈りの歩みをしたいと願う者ならば、真剣に傾聴すべきものとなっているのです。



クリスチャンのためのとりなし

祈る人々はほぼ例外なく、自分自身の弱さや足りなさを鋭く意識しているものです。これはとりわけ、神のみ

こころに従って祈ることを求めていくとそうなります。この意識に欠けるのは、無謀な人々、思い込みの激しい人々だけです。パウロは私たちに対する励ましとして、強い言葉で語っています。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなして下さいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです（ローマ8:26-27）

神の子どもが祈るとき、その人は一人ではありません。神が送ってくださった助け手、聖霊がいてくださるのです。聖霊が自分を通して祈ってくださる時ほど、祈りが聞かれ、慰めが与えられることはありません。では、聖霊は私たちの祈りをどのように助けてくださるのでしょうか。ここで「**助ける**」という言葉は、「**分かち合う**」「**助けに来る**」という意味のギリシア語「スナンティランバノー」の翻訳です。聖霊は、人間の理解では把握できないような祈りの形で、私たちをとりなして下さるのです。そして、聖霊によって促されたこのような祈りは、カリスマ的な現れとなります。そこでは、クリスチャンが心の奥底から語るうめきとともに、聖霊がとりなして下さるのです。ちょうど天においてはキリストが、神の子どものためにとりなして下さっているように（ローマ8:34）、地においては聖霊が、クリスチャンの内側にあつてとりなして下さっているのです。ふだん慣れ親しんでいる言葉では表現できない重荷や願いは、聖霊ご自身に由来するものなのです。

「**弱さ**」という言葉は、ギリシア語の「アスセネイア」という語の翻訳ですが、これは肉体的、精神的、倫理的な弱さを意味するものであり、臆病や霊的な洞察の欠如を含むこともあります。これらの弱さの反対にあるのは聖霊の力（ギ：デュナミス）です。聖霊は、クリスチャンが必要のただ中にあるとき、すなわち、「**私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのです**」（別節）とあるように、全能なる方のみこころが（知的な弱さのゆえに）理解できない状態にある時に、助けてくださるのです。

もちろん、私たちには一般的な意味で導きを与えてくれる聖書があります。しかし、その時の必要に応じて、祈りを具体的なものにして下さるパラクリート、助け手からの支援も必要です。「**御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなして下さいます**」。聖霊が私たちのために内側からとりなしをして下さることを知っているというのは、なんとという慰めでしょうか。聖霊は、このような、言葉にできない切なる思いをかき立ててくださるのです。そしてこれは、人の心を探ってくださいる唯一の神、聖霊の思いに従って答えを与えてくださるお方にしか知られていない思いなのです。

「**うめく**」という言葉は、ギリシア語の「ステナグモス」という、言葉にならないため息と、声として出たうめきのどちらをも表し得る語から来ています。うめき（ないしはため息）については、22節から27節までに三回の言及がなされています。最初は、被造物がすべて、アダムの墮落に伴って失われた状態が回復されるのを待ちわびて、共に痛みの中で嘆息するとあります（22節）。しかし、嘆息しているのはクリスチャンも同じです（23節）。既に霊的には新しい被造物とされたとはいえ、その肉体は、いまだ墮落の支配下にあります。それでクリスチャンも、地上の肉体が、栄化された体に変革されるのを待ちわびて嘆息するのです。最後に、聖霊の嘆息があります（26節）。私たちには、祈れない時があったり、（自分の弱さのゆえに）何のために祈るべきかがわからない時があったりします。聖霊は私たちの代わりに行動を起こして下さり、私たちのためにとりなしをし

てくださいます。パラクリート（助け主）として、祈りにおける弱さにあって私たちを助けてくださるのです。聖霊の嘆息は、まさに言葉では言い表せないものです。あまりに深すぎて言葉にならない嘆息なのです。しかし、これらの嘆息とともに、聖霊は神のみこころに一致する形で、聖徒たちのためにとりなしもして下さるのです（27節）。このとりなしを神は理解しておられます。結果は、「神を愛する人々…のためには、神がすべてのことを働かせて益として下さる」（28節）ということなのです。

注解者の中には、ここでの聖霊の嘆息が異言ないしカリスマ的な発話である可能性を否定する人もあります。ペンテコステ派の人々の多くは、この嘆息に沿ったプロセスに異言の賜物が関与する余地を認めています。しかしながら、この嘆息、あるいはうめきは、そもそも表現のできないものなのであって、いかなる種類のものでもあれ言葉として現れるものではないのです。この嘆息は、神の子どもたちの心の中に表現されます。それを理解できるのはただ、「人間の心を探り窮める方」である）父なる神だけです。聖霊はこれにより、人間的には語ることでできない神の嘆息、神のみこころと一致した嘆息を通して、神の御前における不十分さを私たちが乗り越えられるよう助けて下さるのです。

スタンレー・M・ホートンは、この箇所の流れを、次のように表現しています。

したがって、私たちは現在のからだの弱さの中にとどまっている。しかし、聖霊が共におられる。来べき時代の聖霊の経験は現在の私たちの知識を超えるものとなろうが、彼は今なお人格をもって私たちと共におられ、いつでも現実的に、個人的に助けてくださる。パウロは御霊を助け主、パラクレートとは呼ばなかったけれども、ここでは明らかに、御霊を私たちの助け手として見ていた。聖霊はまさにここにおられて弱さの中にある私たちを助けてくださる。弱いために、私たちはしばしば自分のことや自分の必要がわからない。神のみこころを行いたいと思うが、どのように祈るべきかさえわからない。そこで、聖霊が助けに来て、言葉にならない深いうめきをもって私たちのために（私たちに代わって）とりなしして下さるのだ。

このうめきは言葉で表せない。…しかし、うめきは言葉によって言い表す必要のないものである。私たちの心の中をご存じの同じ神、同じ天の父は、御霊の思いが何であるかをご存じである。だから父と聖霊との間には言葉を必要としない完全なコミュニケーションがある。さらに、聖霊は神のみこころが何であるかを知っておられるから、聖霊のとりなしは神のみこころにそっていることを確信できる。言いかえると、聖霊の祈りは聞かれることを確信することができる。実に、どんなものも私たちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、私たちを引き離すことはできない、とパウロが言うとおりであります。

心の証し

もしも、祈りの内容と様式について書かれている聖書の箇所がどれも明確で他の解釈を許さないものであれば、どれほどありがたいことでしょうか。現実はそうではありません。もしも、公共の場での祈りについての適切な服装と頭のかぶりものについての主張に対して、パウロが理由を語ってくれていたなら、私たちも、それが時空を超えた普遍的な真理であるのか、彼が生きて働いていた時代にのみ関連するものであるのか、より良い判断を下せることでしょうか。中でも、パウロがコリントの人々に対して書いている箇所ほど、議論を呼んでいるものはおそらくありません。コリントの人々は、古代、最も裕福ながら倫理的に退廃した都市の一つにおいて、光になるうと格闘していた人々でした。

男が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていたら、自分の頭をはずかしめることになります。しかし、女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭をはずかしめることになります。それは髪をそっているのと全く同じことだからです。女がかぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまいなさい。髪を切り、頭をそることが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。……あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が頭に何かぶらないうで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。自然自体が、あなたがたにこう教えていないでしょうか。男が長い髪をしていたら、それは男として恥ずかしいことであり、女が長い髪をしていたら、それは女の光栄であるということです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。たとい、このことに異議を唱えたがる人がいても、私たちにはそのような習慣はないし、神の諸教会にもありません。(I コリント 11:4-6,13-16)



神は私たちの態度と内なる献身の思いにのみ関心を抱いておられるのだと考えるなら、それは、聖書がここで教えている内容への明確な違反となります。適切で慎ましい服装をすることは、共同体においても、集団での礼拝においても、あらゆる時と文化にとって有効な、聖書的原則だからです。聖書的な教えを理解・適用するに際して、文化的な側面に配慮するがあまりそこから過剰な影響を受けてしまってはなりません。慎ましさと適切さの原則は、時代の文脈の中で適用されるべきものです。私たちは、一世紀のユダヤ人クリスチャンのような服装と髪型をするよう言われているのではありません。彼らのように、慎ましさを身にまとい、他人に受け入れられやすい振る舞いをしなければならないということなのです。

男は祈りや預言に際し、頭にかぶりものをしていないというパウロの宣言(11:4)は、後に、ユダヤの規範と矛盾するものとなります。ユダヤ人たちは現在、どのようなかぶりものであれ、男性が頭にかぶりもの無しで祈るのを許しません。なぜなら、かぶりものをしていないことで、その人は、神の御前に恥じていること、自分が神に向き合うにふさわしくない者であることを示しているからです。それでは、もしも野球帽をかぶって祈ると、神を不快にさせることになるのでしょうか。あるいは、私たちは祈りに際し、その場にいる人々の潜在性的かつ否定的な反応を気にすべきなのでしょうか。自分が敬意を払いたいと思う人々の前で帽子を取る人がるように、敬意という原則もまた、慎ましさと適切さとともに考慮されなければならないのです。

5節では、文化的に過度に強調されていた考え方が導入されています。「しかし、女が、祈りや預言をすると

き、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭をはずかしめることになります」。当時、女性の通常のかぶりものは、髪を覆うための一切れの布やヘアネットであり、今日ならば（顔を覆うベールではなく）スヌードと呼ばれるのによく似たものでした。女性が公共の場で適切なかぶりもの無しで見られるべきではないというのは、ギリシア人やローマ人の間では慣習であり、ユダヤ人の中では明文化された法でした。公共の場に姿を現す娼婦たちは、その職業のしるしとしてそのような慣習を無視していました。そのため、女性が適切なかぶりもの無しで公共の場に現れることは、不埒なことであり、夫の評判を貶めるものだったのです。

13節は礼節に訴えかけるものです。「あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が頭に何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか」。パウロの言葉をわかりやすく言い換えるなら、「文化や他の要素を考慮するとして、女性たちが公共の場でかぶりもの無しで祈るのはもっともなことでしょうか」となります。確かに、女性祭司たちがかぶりもの無しで祈ったり、託宣を語ったり、あるいは、髪の毛をぼさぼさにしたりなびかせるなど、異教の形に合わせるといのは、敬虔なクリスチャン女性としては品位に欠けるものであったことでしょう。

パウロは記しました。物事すなわち人間の慣習の本質の教えているところによれば、男性が長い髪をしているのは恥ずべきことであり、一方で、女性の髪が長いのは女性にとっての誉れだとも教えられているのです（14-15節）。恥とは文化的な事柄なのでしょうか、それとも、神は男性の長髪を恥ずべきものと考えておられるのでしょうか。神に対する献身を誓うナジル人の誓いでは、髪を切ることは禁じられています（民数記6:5）。キリスト教社会の中にも、威厳のある大人の男たちが長髪であったり、かつらをかぶっている時代がいくつもありました。事の本質は今なお、パウロがそうだと語っていたままと教えているのでしょうか。それとも、「自然という言葉と文化的尊重とが混ざり合うようなこともあるのでしょうか。これらの点について教条的になったり論争を好んだりするのはクリスチャン的ではないと思われるかもしれません（11:16）。しかしながら、慎ましさ、礼節、尊敬の原則は妥協すべきものでもありません。

ここで思い起こす必要があるのは、この第一コリントⅡ章31節で一番に言及されているのは、公共の場での祈りと礼拝における、諸教会に共通した慣習だということです。他のクリスチャンたちとともに聖なる神の臨在の中に入っていくとき、私たちの態度や服装、私たちについて語るあらゆるものが、節度や慎ましさ、秩序を証しするものであるべきだということです。外側のものが内面の欠如を補うことはできません。しかし、外に現れるものは、時として、内側にあるものを声高に証しするものとなるのです。